



Title	福祉サービスを利用している青年の日本語受身文の感情価に関する予備的研究
Author(s)	萬谷, きみ子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 142, 37-49
Issue Date	2023-06-26
DOI	10.14943/b.edu.142.37
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90064
Type	bulletin (article)
File Information	06-1882-1669-142.pdf



[Instructions for use](#)

福祉サービスを利用している青年の 日本語受身文の感情価に関する予備的研究

萬 谷 きみ子*

【要旨】 福祉サービス利用者を対象に、日本語受身文を読んだ際に当該文に対して抱く感情価を測定し、社会適応が困難である背景を言語と感情の関係から探った。協力者は18歳から25歳までの福祉サービスを利用している青年12名と、大学生106名であった。

日本語受身文は、直接受身文を3種類（ネガティブ・ポジティブ・無生物主語）と間接受身文（ネガティブ）の4カテゴリーの受身文を使用した。感情価はVAS法で測定した。

福祉サービス利用群と大学生群について、4文種毎にマン・ホイットニーのU検定で比較を行った。直接受身文（無生物主語）において有意な群間差が認められた。直接受身文（ネガティブ・無生物主語）、間接受身文（ネガティブ）の感情価分布の有意な群間差がカイ二乗検定で確認された。サービス利用群はネガティブな間接受身文と直接受身文の文間に有意差が認められなかった。

本研究において、福祉サービス利用者は、日本語受身文の種類によっては、周りの人とは異なる感情を受け取っている可能性が示された。この周りの人とは異なる感情理解が、心理的不安や社会適応の困難の背景の一つとなり得ることが推察された。

【キーワード】 福祉サービス利用者 感情価 日本語受身文 間接受身文 無生物主語文

1. 問題の所在および目的

筆者は相談支援専門員として高等学校等卒業後すぐに自立支援事業所や就労支援事業所の福祉サービスの利用を始めた青年たちと関わってきた。彼らの中には、「周りの人が笑っている理由が、自分だけ分からなかった。」「自分は自分の気持ちが良く分からない。」「自分の気持ちを誰も分かってくれなかった。」等と自分が経験してきた悩みを語る者が少なくない。彼らは、様々な事情のためにほとんどの人が医療受診はなく未診断であるが、社会生活上の困難さがあるために福祉サービスを必要している人達である。

この青年達は、彼らの悩みから考えると、感情把握の苦手さや、他者とのコミュニケーションに困難さを抱えていることが推察されるが、その困難に対応するニーズの把握や支援の在り方についての研究が求められる。実際、神尾ら（2013）は「未診断自閉症スペクトラム児者の精神医学的問題」の中で、ASD閾下ケースの臨床ニーズにもっと光を当てる必要性を示唆している。彼らの悩みは社会適応の上で深刻であり、それに対応する理解と支援の必要性

* 北海道大学大学院教育学院教育社会論講座 博士後期課程
DOI: 10.14943/b.edu.142.37

は高い。彼らは日常生活での他者とのやり取りに感情的な違和感をもっていると思われるが、違和感の背景にある困難さの特徴を把握する必要がある。

日本は「曖昧な言語表現が数多くある」言語文化を有しているが、中でも受身文は、外国人学習者にとって学習が難しい項目の一つとされている（李, 2015）。その難しさの理由の一つとして、日本語の視点の制約が挙げられている。すなわち話し手は常に自分の視点を取らなければならない、他者の視点を取ることができないという視点の制約（久野, 1978；馮, 2017）の存在である。つまり、日本語受身文は、一部を除いて、話者の視点で語られている。そのため、もし受身文における話者の視点を把握できない場合には、文が伝えようとする意味を正確に把握できないことになる。

例えば「父に窓を開けられた。」という日本語受身文には、言葉には表現されていないが、「話者は窓を開けないでほしいと思っていたのに、父が勝手に開けてしまい、話者にとっては迷惑だった」という意味、もしくは「話者が窓を開けようと思っていたのに、父に先に窓を開けられてしまって、話者は少し面白くなかった」という意味が暗に込められている。どちらの文解釈においても、この文を話した時の話者は、字面としての文には直接的には表現されていないが、話者自身が少しだけ感じていた被害・迷惑心情を伝えていと理解できる。もし、会話の際に、話者が少しだけ感じていた被害・迷惑的な心情をつかむことができなければ、聞き手は話者の心情を考慮したコミュニケーションが難しくなる。このように日本語受身文の中には、話者の視点から暗に伝えられる感情を把握することが文章の理解に必要な文種が含まれている。このことから日本語受身文は、聞き手が話者の発話の背景にある心情をどのように把握しているかについても検討することができる貴重な言語刺激材料であると考えられる。

ところで日本語受身文には「子どもが犬に助けられた」のような能動文に置き換えが可能な直接受身文と、能動文への置き換えができない「父は母に鍵をかけられた」のような間接受身文とがある（高見, 2011）。この間接受身文は、一般に迷惑を被る意味を有するため「迷惑の受身」とも呼ばれる。また、動作対象（鍵）に対する動作主（母）の動作（かけた）により第三者（父）が間接的に影響を被るという点に着目して「第三者の受身」と呼ばれることもある（新版日本語教育事典, 2005）。

間接受身文は「間接的に影響を受ける第三者が元の能動文には含まれない」ため、上述したように能動文への置き換えが困難となるが、このタイプの受身文は他の言語ではほとんどみられない。

さらに日本語受身文には、「利害の表明という意味機能がある」（高見, 2011）が、直接受身文の中には、利害にかかわらない受身として非情物（無生物）を主語とする「非情の受身」が存在する（新版日本語教育事典, 2005）。そのため日本語受身文は、利害を意味する受身文と併せて、主語によっては利害にかかわらない「客観描写となる（高見, 2011）」受身文も一部混在している。日本語受身文のこういった特徴は、利害感情の微妙な受け止め方の違いを調べる際の言語刺激として好材料となり得る。

本研究では、この日本語受身文を言語材料として、福祉サービスを利用している青年期の方々が受身文を読んだ時に感じる利害感情の程度を感情価として測定することとした。これにより、直接受身文と間接受身文の利害感情の受け取り方の違いや、第三者や話者の心情の把握の仕方の違いなどを把握するとともに、社会適応に困難のある人達の背景にある言語と

感情の関連について探ることを目的としている。

利害感情の測度としては、ポジティブあるいはネガティブの程度を適切に把握する為に感情価 (emotional valence) を使用した。感情価とは、覚醒度の軸と共に、感情を位置づけることができる2つの座標軸の一つであるとされ、ある刺激に対して連続的に表される値であるとされている (APA Dictionary of Psychology, 2020)。

2. 方法

1. 調査協力者

福祉サービス利用群 (以下、サービス利用群) として、この調査に協力可能な18歳から25歳までの青年12名。対照群として、18歳から20歳の一般の大学生106名。

サービス利用群については、①事業所のスタッフにこの研究の概要を説明し、②今回の課題を遂行できるとスタッフが判断した方の紹介を受け、③当該の利用者の方に研究協力を依頼した。依頼のプロセスとしては、該当と思われる方にまず簡単な研究説明文書 (チラシ) を直接手渡しして読んでもらい、本人から研究協力の同意があった場合、研究説明書を読みあげて、誤解がないように調査の詳しい説明を行った。説明後、同意の確認が再度得られた場合に調査を行った。

大学生は、筆者が非常勤講師をしていた大学で、授業後に調査目的を説明し、退室しなかった学生に調査書を配った。調査書の表紙には調査目的を記し、同意欄にチェックをした協力者のデータを有効回答とした。チェックがない協力者やページを飛ばして回答した協力者のデータについては、調査結果に含めなかった。

2. 調査方法

① 調査手順

サービス利用群の協力者に対しては、個別の調査を行った。協力者には、回答の仕方を十分に理解できるまで説明してから調査を開始した。調査時間はおおよそ20分程度であった。大学生は、調査票の表紙に記された調査目的を読んで同意が得られた人を対象に、回答の仕方を全体に説明した後、一斉に調査を開始した。回答にかかった時間はおおよそ10分前後であった。

② 調査票

調査票はA3版用紙を2枚とA4版用紙1枚を使用し、10ページとした。大学生に使用した調査票には、表紙に研究目的と研究同意確認のためのチェック欄を設けた。2ページ目には、両群の調査票とも、年齢、性別、母国語を記してもらう欄を設け、その下部に、具体的な回答の仕方を説明する図を示した (資料1)。3ページから10ページには、回答してもらう文を、各ページに8文ずつ記載した (資料2)。日本語を母語とする人のデータを得るため母国語欄を設けた。

③ 評価対象の受身文

成人であれば自然に理解でき、心理的負荷を与えない内容の受身文とした。直接受身文と間接受身文の区別は、日本語基本動詞用法辞典で示されている例文を参考にした(表1)。

表1 刺激文例

直接受身文 (ネガティブ)	直接受身文 (ポジティブ)	直接受身文 (無生物主語)	間接受身文 (ネガティブ)
ネコは 太郎に 捨てられた。	太郎は イルカに 救われた。	この本は みんなに 読まれている。	入り口に 自転車を 並べられた。(他)
カメは 太郎に 踏まれた。	インコは 太郎に 愛された。	花壇に 花が 植えられた。	学校で かぜを うつされた。(他)
太郎は カンガルーに 蹴られた。	太郎は ハムスターに なつかれた。	ミカンが コンビニで 売られていた。	太郎に 小鳥を 逃がされた。(他)
太郎は イヌに 咬まれた。	太郎は 子イヌに 励まされた。	卒業式で 校歌が 歌われた。	帰りに、雨に 降られた。(自)

(他)：他動詞文 (自)：自動詞文

④ 評価対象の受身文の総数

受身文の総数は64文である。内訳を以下に示す。

- i 直接受身文 (ネガティブ)：人または動物が主語の被害・迷惑の意味を有する述語動詞文 16文
- ii 直接受身文 (ポジティブ)：人または動物が主語の利益・恩恵の意味を有する述語動詞文 16文
- iii 直接受身文 (無生物主語)：主語が生物でない直接受身文 16文
- iv 間接受身文 (ネガティブ)：被害・迷惑の意味を有する間接受身文 (自動詞文3文 他動詞文13文) 16文

3. 感情価の測定方法

本調査では、各協力者の微妙な感情の捉え方の違いを測定するために、数字や線による影響が少ないVAS (Visual Analogue Scale) 法を用いて感情価を測定した。具体的には、約10 cmの直線の両側に相対する感情(マイナスの感情とプラスの感情)を置き、この線上に対象者が感じたと思う感情とその度合いに合致すると思う直線上のポイントに、直線と交差する線を引いてもらい、交差線が直線と交わる点の位置を測定した(図1)。プラスかマイナスかの判断のための感情例と記入の仕方については、調査票2ページ目に記載した(資料1)。

調査データは、中央線の左側をマイナス、中央線の右側をプラスとし、中央線からの距離を、製図用のステンレス定規を用いてミリ単位で実測した。

測定した感情価は、5mm以上をプラス、4mmから-4mmをニュートラル、-5mm以下をマイナスとして、3領域に分けて検討を行った。

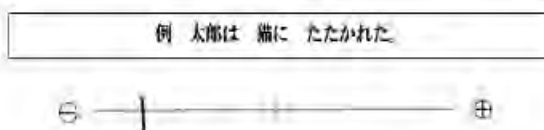


図1 調査票記入例

4. データ解析方法

本研究では、サービス利用群の協力者が12名であるのに対して、大学生群が106名とサンプル数に差があるために母集団の正規性や等分散性を仮定することが難しく、VASで測定された感情価データは交差点までの実測値ではあるが、順序尺度の性質を有するものであることから、マン・ホイットニーのU検定とカイ二乗検定を用いたノンパラメトリック検定により解析を行った。

3. 結果

サービス利用群と大学生群の間で受身文の種類によって差があるかを検討するため、各文種16文の両群の協力者の中央値を算出し、文種毎にU検定を行った(表2)。

その結果、直接受身文(無生物主語)で有意な群間差が認められ、サービス利用群の中央値は大学生群に比べてプラス方向に寄っていた(U(12,106)=404, $p=0.006$)。

表2 各文種におけるサービス利用群と大学生群の各文種各人代表値の中央値とU検定結果

	サービス利用群		大学生群		U値	p値
	中央値	平均順位	中央値	平均順位		
直接受身文(ネガティブ)	-14.75	76.708	-23.5	57.552	429.5	0.066
直接受身文(ポジティブ)	25.75	70.083	24	58.302	509	0.258
直接受身文(無生物主語)	6.25	78.833	0	57.311	404	0.006**
間接受身文(ネガティブ)	-7	70.167	-12.25	58.292	508	0.254
	n=12		n=106		* $p<.05$, ** $p<.01$	

文種毎の各協力者代表値の中央値の比較では、直接受身文(ポジティブ)では、中央値に差は認められなかった。しかし、直接受身文(ネガティブ)と間接受身文(ネガティブ)は、共にサービス利用群の値が大学生群に比べて中心寄りであり、サービス利用群は大学生に比べてネガティブさの感情価判断の捉えが弱い傾向が見られた。また、直接受身文(無生物主語)では、サービス利用群がプラスの値を示したのに対して大学生群は中心の0を示しており、サービス利用群はポジティブな感情価判断を行っているが、大学生群はポジティブでもネガティブでもない感情価判断を示していた(表2)。

そこで、各文種の感情価判断の分布が、群でどのように異なっているかを確認するために、プラス(5mm以上)、ニュートラル(-4mm~4mm)、マイナス(-5mm以下)の3領域の感情価分布の違いを、カイ二乗検定により確認した。

その結果、直接受身文(ネガティブ)($\chi^2(2) = 34.837, p<.01$)と直接受身文(無生物主語)($\chi^2(2) = 76.338, p<.01$)、間接受身文(ネガティブ)($\chi^2(2) = 76.338, p<.01$)において有意な群間差が認められた。直接受身文(ポジティブ)には、有意差は認められなかった。

どの領域に差があるのかを確認するために残差分析を行ったところ、直接受身文（無生物主語）においては、サービス利用群はプラス領域の感情価判断が多いが、大学生群はニュートラル領域の感情価判断が多くなることが示された。マイナス領域には両群の差は認められなかった（表3）。

また、直接受身文（ネガティブ）と間接受身文（ネガティブ）の両文種においては、サービス利用群は、ニュートラル領域とプラス領域に感情価判断が有意に多く分布し、大学生群はマイナス領域に感情価判断が有意に多く分布することが示された（表4, 5）。

表3 直接受身文（無生物主語）感情価3領域の χ^2 検定残差分析結果

感情価領域	-5以下	-4～4	5以上
サービス利用群	22	74▽	96▲
大学生群	186	1137▲	373▽

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p<.05$)

表4 直接受身文（ネガティブ）感情価3領域の χ^2 検定残差分析結果

感情価領域	-5以下	-4～4	5以上
サービス利用群	137▽	46▲	9▲
大学生群	1478▲	180▽	38▽

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p<.05$)

表5 間接受身文（ネガティブ）感情価3領域の χ^2 検定残差分析結果

感情価領域	-5以下	-4～4	5以上
サービス利用群	93▽	71▲	28▲
大学生群	1152▲	476▽	68▽

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p<.05$)

また直接受身文（ネガティブ）と間接受身文（ネガティブ）の2文種間で差があるかを検討するために、サービス利用群と大学生群のそれぞれでU検定を行った。その結果、サービス利用群には有意差が認められず（ $U(12, 12) = 53.5, p = 0.283$ ）、大学生群では有意差が認められた（ $U(106, 106) = 3227, p < 0.001$ ）。ネガティブ文において、サービス利用群は直接受身文と間接受身文の感情価に差は認められなかったが、大学生群は直接受身文と間接受身文で有意差が認められた。

4. 考察

直接受身文（無生物主語）について

直接受身文（無生物主語）は主語が無生物であり、生物が主語であった直接受身文（ネガティブ）と直接受身文（ポジティブ）とは、主語たる受身の動作対象が異なっていた。結果から、4種類の受身文の中で、感情価は直接受身文（無生物主語）においてのみ、サービス利用群と大学生群の有意な群間差が認められた。また、直接受身文（無生物主語）の感情価分布にお

いて、サービス利用群はプラス領域に感情価が多く分布し、大学生群はニュートラル領域に感情価が分布することが確認された。

サービス利用群の感情価は、生物主語文では大学生群との間に差が見られないにもかかわらず、なぜ無生物主語文では大学生群との間に差が見られ、大学生群のようにニュートラルな領域に分布しないのか。

この点については、本研究がこれまで行われたことのない日本語受身文の感情価測定であるため、本研究結果のみからはでは十分に検討を深めることが難しい。しかし、日本語受身文の特徴から、次のような可能性が考えられる。

無生物主語は、英語では特別なものとして意識されずに使用されているが、「日本語では無生物主語構文が特別な状況を除いてあまり好まれない」ことや、「話し手が、無生物に自分の視点を近づけて受身文を用いるような場合は、客観描写となる」(高見, 2011) ため、大学生群は日本語の無生物主語文を、生物主語文とは異なる客観的な受身文としてとらえた結果、その他の受身文とは異なるニュートラルな感情価を示した可能性があると思われる。一方、サービス利用群は大学生群のような特別なものとしての前提が希薄なために、無生物主語文をその他の受身文と区別せずに感情価判断を行った可能性、もしくは、主体に自己を投影・埋没させる程度に心理的距離が近いことを示している可能性が推察される。

サービス利用群の社会適応の困難さの背景の一つとして、客観的な受身文として無生物主語構文を捉える前提の希薄さや、受身文主語たる被動作対象と読み手である自己が重なるほどの心理的距離の近さが関連しているかどうかについては、今後さらなる検討が必要と思われるが、動作対象である受身文主語への心理的距離の近さについては、杉山 (2016) が「自閉症の語用論的障害が社会性の障害を基盤にした言語機能不全」であると論じる中で「認知対象との間に心理的な距離が作られない」ことに言及したことと関連していると思われる。

このような社会的な前提の把握の難しさや認知対象への心理的距離の近さについては、ASD研究で検討が行われている (Frith, 2003;杉山, 2016;田中・神尾, 2007)。本研究結果については、後続して行う予定のASD診断のある研究協力者の調査結果も含めながら、引き続き検討を行っていきたいと考えている。

直接受身文 (ネガティブ) と間接受身文 (ネガティブ) について

感情価判断では、直接受身文 (ネガティブ) と間接受身文 (ネガティブ) の文種間において、サービス利用群では有意差が認められず、大学生群にのみ有意差が認められた。また感情価分布では、直接受身文 (ネガティブ) と間接受身文 (ネガティブ) にサービス利用群と大学生群の有意な群間差が認められた。感情価分布は、直接受身文 (ネガティブ) と間接受身文 (ネガティブ) で共に、サービス利用群はニュートラル領域とプラス領域に感情価の判断が有意に多く分布し、大学生群はマイナス領域に感情価の判断が有意に多く分布することが示された。

間接受身文とは、対応する能動文が存在せず、(i) 被害・迷惑の受け手が関わらない事象があり、(ii) その事象によって被害・迷惑を被った人を主語に立て、(iii) その事象を受身で表現するタイプの受身文である (高見, 2011)。間接受身文の主語はほぼ「私」(話者) であるが、普通その「私」は省略されている (日本語教師の広場, 2020)。そのため日本語間接受身文の理解には、その文表現からどのような事象が生じているかを想像することに加えて、字

面の文では直接表現されない、通常は省略されている「私」(話者)の、もしくは第三者の「迷惑を被る」という被害的意味を捉える必要がある。

サービス利用群に直接受身文(ネガティブ)と間接受身文(ネガティブ)の文種間で有意差が見られなかったことは、サービス利用群が間接受身文に含まれていた直接には表現されていないやや被害的な意味を捉えられていなかったことを示していると思われる。間接受身文の被害的意味を捉え切れなかった理由を言語学の面からみると、「デフォルト解釈」(児玉, 2008)による推測の困難さを反映している可能性がある。児玉によれば、デフォルト解釈とは、言語表現が欠如していても、話し手、聞き手が現実世界の知識、認知能力の制約、価値観などの信念体系などに従って言外の意味を推論し解釈することを言う。この論からは、サービス利用群は言外の意味を解釈し推論する仕方が、大学生群とは異なる可能性が考えられる。

しかし感情価分布の検討からは、間接受身文(ネガティブ)に加えて直接受身文(ネガティブ)においても、すなわち両方の文種において、サービス利用群が大学生群よりも中心の0に近い領域に感情価が多く分布していることが示された。この結果は、サービス利用群が間接受身文で「話者もしくは第三者の「迷惑を被る」という被害的意味を捉え切れなかった」とするだけでは説明されない。むしろ、受身文の直接・間接のタイプにかかわらず、サービス利用群の被害的意味の捉え方が全体として、大学生群に比べて弱いことを示唆する結果であると思われる。

ここで、さらに考察すべき結果は、直接受身文(ポジティブ)では、感情価分布に群間差が認められなかったことである。これについては、サービス利用群が「全体的にポジティブを示す」ために、ネガティブ文においては、ポジティブさを示さない大学生群との間に差が見られるが、ポジティブ文では、大学生群もポジティブさを示すために、差が認められなかった可能性が考えられる。

では、なぜ、サービス利用群は、ネガティブ文で大学生群に比べて被害的意味の捉えが弱くなるのだろうか。このことについては、サービス利用群が有している困難と類似した困難を有しているASD児者の特徴と照らし合わせながら考えることができるように思われる。もし、サービス利用群がASD児者の認知特徴に近い認知特徴を有していると仮定することができれば、被害的意味の捉え方が弱くなることについて、次のような可能性が考えられる。

サービス利用群は、間接受身文(ネガティブ)については、話者もしくは第三者の「迷惑を被る」という被害的意味を捉え切れていない可能性がすでに示されているが、直接受身文においても被害的意味を捉え切れていないことが示されたことになる。直接受身文(ネガティブ)では、主語が明示されているにもかかわらず、被害的意味を捉え切れないということは、主語に対する他者視点取得が十分でないために、大学生群ほどのネガティブ感を持たなかった可能性がある。

以上、サービス利用群には間接受身文(ネガティブ)の省略されている「私」(話者)や第三者の被害的意味の捉えの弱さ、直接受身文(ネガティブ)の他者視点取得の弱さの可能性が推察された。これらの結果と考察については、ASD診断のある人の調査結果とも照らし合わせながら、今後もさらに検討を続けていきたいと考えている。

感情価測定について

本研究は、感情価を使用した予備的研究として行われた。福祉サービス利用者は、調査後

の感想で「(本調査への参加体験が)おもしろかった」と述べた人が多く、検査中に判断に迷ったり、悩んだりする様子は見られなかった。数直線上に印をつける作業に戸惑う様子も見られなかった。このことは、VAS法の利点である回答方法が、カテゴリーラベルの解釈に影響されない(山田・江利川, 2014) ことにより、社会適応に困難さを感じる福祉サービス利用者にとっては、感情価が「自分の感情を表しやすい測度」となっている可能性を示したと思われる。

5. 結論

福祉サービス利用している青年達は、無生物主語文においてニュートラルの感情価判断を示した大学生群とは異なり、ポジティブな感情価判断を行っていた。この結果の背景として、無生物に対するサービス利用群の心理的距離が極めて近い可能性が考えられた。

またこの青年達は、ポジティブ文では大学生群と差がないにもかかわらず直接受身文と間接受身文のネガティブ文では、どちらも全体的には弱いネガティブな感情価の判断を示しており、青年達の被害の意味の捉え方が、全体として大学生群に比べて弱いことが示された。この結果から、青年達の他者視点取得の弱さが示唆された。

さらにこの青年達は、直接受身文(ネガティブ)と間接受身文(ネガティブ)に違いが見られず、間接受身文が有している省略された「私」(話者)や第三者を意識することが難しいことも可能性の一つとして示された。

以上のことから、福祉サービス利用している青年達は、受身文の種類によっては、周りの人との感情の判断や、被害感情の捉え方が異なる場合があることが示された。

このような周りの人とはやや異なる感情の捉え方が積み重なっていく状況下では、それに伴って心理的緊張や予期不安が高まり易いことは十分に推測される。社会適応に困難が生じている人達の背景の一つには、外側からは目にすることができない感情把握や感情判断の困難さが存在している可能性があると思われる。

こうした青年達への具体的支援を検討していくために、社会適応の困難の背景について、今後さらに研究を進めていく必要を強く感じている。

謝辞

論文執筆に当たっては、度重なるディスカッションを通してご指導いただいた安達潤教授に、心より感謝の意を表します。

引用文献

- APA Dictionary of Psychology. <https://dictionary.apa.org/emotional-valence>. (Retrieved December 21, 2020)
- Frith, U. (2003). *Autism: Explaining the Enigma-second edition*. 富田・清水・鈴木訳 新訂自閉症の謎を解き明かす. 東京書籍 (2009).
- 神尾陽子, 森脇愛子, 武井麗子, 稲田尚子, 井口英子, 高橋秀俊, 中鉢貴行 (2013). 未診断自閉症スペクトラム児者の精神医学的問題. 精神誌, 115, (6)

- 馮雁鴻, 朱一平 (2017). 教科書における受身の扱い方: 中国語母語話者の誤用の視点から. *国文学研究ノート*, 56, 44.
- 児玉徳美 (2008). デフォルト解釈の見直し. *立命館文学*, 606, 8-20
- 久野暲 (1978). 「談話の文法」. 大修館書店
- 日本語基本動詞用法辞典 (1989). 大修館書店
- 日本語教師の広場 もう一步踏み込んだ間接受身. <https://www.tomojuku.com/blog/passive/passive-11> (2020年12月19日閲覧)
- 李, 偉 (2015). 日本語の受身文の習得に関する文献から見た研究動向. *日本語・日本文化研究*, 25
- 杉山登志郎 (2016). 自閉症の精神病理. *自閉症スペクトラム研究*, 13(2), 5-13.
- 高見健一 (2011). 受身と使役 その意味規則を探る. 開拓社
- 田中優子・神尾陽子 (2007). 自閉症における語用論研究. *心理学評論*, 150(1), 54-63.
- 山田一成・江利川滋 (2014). Web調査におけるVisual Analogue Scaleの有効性の評価. *東洋大学社会学部紀要*, 52(12), 57-70.

参考文献

- Lartseva, A., Dijkstra, T., & Buitelaar, J. K. (2015). Emotional language processing in autism spectrum disorders: a systematic review. *Frontiers in human neuroscience*, 8, 991.

資料1

感情価調査票 2ページ目

20 年 月 日

受身文を読んだ時に感じる感情価とその程度に関する調査

年齢 () 歳・表明しない 性別 男・女・その他
 専攻 理科系・文科系・その他 母語 日本語・その他

それぞれの受身文を読んだ時に、⊖ (損害、迷惑、損、悲しい、不満、嫌、困る、等々)、⊕ (利益、感謝、得、嬉しい、満足、恩恵、好、助かる、等々) か、中立か、の感じる程度を**深く考えずに、直観で**、それぞれの文について横直線上に縦線を引いて示してください。

例 太郎は 猫に たたかれた。

⊖

損害

迷惑

損

悲しい

不満

被害

嫌

困る

等々

どちらでもない場合は、中央へ線を引いてください。

- ・⊖の意味を感じる場合は、左寄りに線を引いてください。
- ・中央からの距離で、あなたが感じる度合いを表します。
- ・交差する点の位置が左にいく程、⊖の意味が強くなります。

- ・⊕の意味を感じる場合は、右寄りに線を引いてください。
- ・中央からの距離で、あなたが感じる度合いを表します。
- ・交差する点の位置が右にいく程、⊕の意味が強くなります。

間違った場合は、その線を丸で囲んでバツ印をつけてください。

⊕

利益

感謝

得

嬉しい

満足

恵

好

助かる

等々

資料2

ココアは 子^こどもに 飲^のまれている。



絵^えが 壁^{かべ}に 掛^かけられた。



太郎^{たろう}は イルカに 救^{すく}われた。



太郎^{たろう}は カンガルーに 蹴^けられた。



太郎^{たろう}は ネコに 引^ひっかかれた。



ヤギは 太郎^{たろう}に 閉^とじこめられた。



箱^{はこ}に 布^{ぬの}が かけられた。



太郎^{たろう}は イヌに 咬^かまれた。



A Preliminary Study on the Emotional Values of Japanese Passive Sentences of Youth Using Welfare Services

Kimiko YOROZUYA

Key Words

Welfare service users, emotional values, Japanese passive sentences indirect passive sentences, inanimate subject sentences

Abstract

We measured the emotional valences of welfare service users when they read Japanese passive sentences, and explored the background of social adaptation difficulties from the stand point of the relationship between language and emotions. The participants were 12 youths aged 18 to 25 using welfare services and 106 university students.

For Japanese passive sentences, we used four categories of passive sentences: three types of direct passive sentences (negative, positive, inanimate subject) and indirect passive sentences (negative). Emotional valences were measured by VAS method.

The Mann-Whitney U test was used to compare the welfare service user group and the university student group for each of the four categories of the passive sentences. A significant difference was observed between the two groups in direct passive sentences (inanimate subjects). Differences in emotional valence distribution between the two groups in direct passive sentences (negative), direct passive sentences (inanimate subjects) and the indirect passive sentences (negative) were confirmed by the chi-square test. For the service user group, no significant difference was observed between the negative indirect passive sentences and the negative direct passive sentences.

In this study, it was shown that welfare service users may receive different emotions from those people around them, depending on the types and sentences of Japanese passive sentences. It was suggested that these different feelings from those around them could be one of the background factors that may cause psychological anxiety and difficulties in social adaptation.

